

「美艷仙女(せんじょ)香 坂本氏」と役者絵

中村 恵美(立命館大学アート・リサーチセンター 客員研究員)

E-mail kyoya-dan8@email.pala.or.jp

要旨

文政 5 年(1822)頃から、種々の版本や錦絵に頻繁にその名が見える、「お顔のお薬 美艷仙女香 坂本氏」については、広告や化粧などの分野で多数の論考が既にあるが、役者絵の分野ではまだあまり論じられていないと考えられる。今回、役者の口上や宣伝を描いた役者絵を取り上げてみたい。関連してこの宣伝の仕掛人についても若干触れる。

abstract

While there has already been much discussion in the fields of advertising and cosmetic history about the name "Okao no Okusuri Bien Senjo Ko Sakamoto"(Sakamoto, [maker of] Bien Senjo Ko medicine for the face) which frequently appears in various types of printed books and ukiyo-e prints from around 1822 (Bunsei 5), there has perhaps not yet been much discussion of this in studies of yakusha-e (actor prints). In this paper, I would like to examine actor prints depicting actors' onstage announcements or publicity. I also touch briefly on the producers of this publicity.

はじめに

薬種商坂本氏は、文政五年(一八二二)頃から天保十三年(一八四二)頃迄各種版本や錦絵類に広告文句「お顔のお薬 美艷仙女香」や包紙等を継続して掲載し、自家の化粧品の宣伝を弘めている。狂歌堂真顔の狂句「中はしのおまんが紅も京はしのおせん女香のつやにおよはし」『春色袖乃梅』二編上之巻見返しや双六「狂詠江戸のはな」等も宣伝文句に使用もしている。従来このような広告方法は珍しいものではないが、これほど長年にわたって、多数掲載できたことについて、種々論議^①がなされてきた。ただ役者絵については幾つか取り上げられてはいるが、全体的な考察はないようである。此度、役者絵や役者達との関りの一部について取り上げて、試論としたい。それに加えて、背後にいた仕掛人についても若干触れることとする。

第一章 天保五年(一八三四)森田座でのキャンペーン

白粉「美艷仙女香」や白髪染「美玄香」を扱う薬種商坂本氏の店はもとと京橋南伝馬町三丁目にあつたが、文政十一年(一八二八)夏に京橋南老丁目四ツ角(京橋の銀座町二丁目かど)に引き移り、天保五年にまた元の地に戻っている。^② これまでも広告宣伝に努めてきているが、とくに天保四年(一八三三)には、『白木屋白妙黒井九郎治 恋衣仙女薫』二世恋川春町作 二代北尾重政画が準広告文学として、西村屋与八から刊行されている。^③

坂本氏が元の地に戻った同年二月に三座は類焼し、もつとも早く本普請がなつた森田座の五月、九月、十一月興行に、リニューアルオープンした坂本氏も舞台でのキャン

ペーンを行い、改めて周知をはかったようである。ただ、これらについて以下に挙げる舞台図以外に記載が今のところ見つからない。天保六年（一八三五）刊役者評判記『役者現銀店』にもなく、五月、十一月の役割番付に商人名があるのみである。

なお、森田座は座元四代目坂東三津五郎、立作者は三世並木五瓶である。

○天保五年五月森田座「妹背山婦女庭訓」三段目（杉酒屋）の口

この舞台では、市川銀兵衛による仙女香の売立が描かれた舞台図がある。辻番付や絵本番付に記載がないが、役割番付に「仙女香坂本□（不読兵衛 市川銀兵衛）」の役名があるので実際に上演した可能性が考えられる。画中のせりふは、「いろいろ売り」のように、先ず最初に製造元の坂本氏を広告し、仙女香・美玄香の由来効能を説明し、早口言葉を連発したと思われ、衣裳も「いろいろ売り」を踏襲している。



図 1 国貞画「鏡山行列之図」三枚続の内
『八代目市川團十郎画像資料集』I p26-1

参考としてあげたいろいろ売りの図1は、天保三年（一八三二）三月市村座「隅田川花御所染」で、六代目市川海老蔵から八代目団十郎を襲名した時のものである。図2は詞章部分が両端切断されているので、別版の同部分を拡大して掲載する。なおこちらの方は柿色部分が退色している。

画中文字は、句読点を適宜加え、平仮名が多く読みづらい部分は最小限漢字に替えている。なお、振り仮名のあるものについては、必要と思われるものだけに限定する。以下同様である。



図 2 「仙女香の商人箱虎 市川銀兵衛」歌川国貞(五渡亭国貞画) 大判 蕨屋吉蔵 極 個人蔵

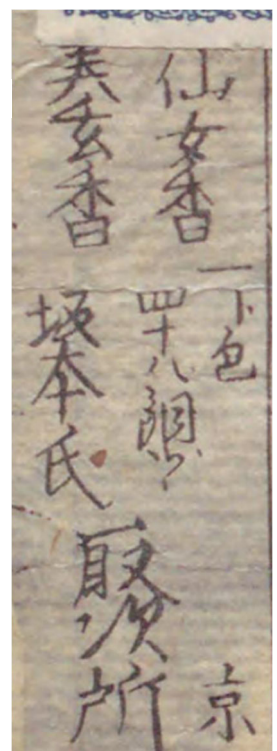
画中文字は、「拙者親方と申升るは、何れも様は御存じもムリ升ふが、御江戸京ばし仙女香通り町にて伝馬町、京ばしよりは少北西中程に目印、八ッ棟造りにムらねど、家根にべつたり金かんばん、家でん美艷仙女香、坂本氏が数年の見せ。まづ元朝より大晦日まで、御手に入ます此おしろい。むかしでんらいの清人長崎丸山の遊女にあたへ、ゆゑ有て私方にでんらいし、今もつはらに流行し、そこでもこでも仙女香。お屋敷方ではとりわけて、おかほの菓の景物に、十包以上おもとめなされば、半四郎でも坂三津でも、好きな役者の自書の扇さし上升るが、家のかぶ。まだ此ほかに黒油美玄香と名つけしは、斎藤別当実盛*にあらねども、白髪をそめる黒油、いつも舞台で箱虎がひろめ升る。廻るはく、おいらん夜鷹陰間までも、顔に化粧のお方なら、此御くすり仙女香にうそこすおしろいムリ升せぬ。有なら買うべいもつてこい。瀧登りはおらが親方、見よふ三升の流れを汲市川銀兵衛箱虎が、亭主に代つて仙女香弘メ升る売升る。うらねば成らぬと息せいはず、真ッ黒に成る美玄香又愛嬌の仙女香、御風興の口上と、ホッ敬曰。妹背山婦女庭訓 三段目の口にて相勤申候。仙女香の商人箱虎 市川銀兵衛 木挽町森田座」

*斎藤別当実盛 源義仲軍と戦う際、老年を隠すため髪を黒く染めて出陣したという武将。(源平布引瀧など)

とある。坂本氏の宣伝文句については、別項で取り上げる。

版元葛屋吉蔵は、この頃坂本氏の取次所(天保六乙未新版稗史類□□)をしている関係もあり、宣伝するこの役者絵を刊行したのである。(図3)ほかに竹内孫八(保永堂)もこの頃取次を始めたようで、「仙女香取次・美玄香取次」と記載した冊子型に役者半身像を描いた「千社詣」などを刊行し、「東海道五十三次」中にも宣伝を入れたものが知られている。

年代により、取次所は変更があるが、絵草紙屋が多数あったようである。文政六年(一八二三)頃の一覧では一番多く、次に水茶屋が続いている。書物や、料理茶屋、舟やど、こまものや、あらものや、奉公人口入所、筆すみや、人形や、かごや、すりのや、あはもちや、たびやなどがあげられ、多種多様な商売のお店が七十軒ほどでネットワークがつくられているのがわかる。ただこの時期は葛屋の名前はなく、この頃は山本平吉、丸屋文右衛門、つる屋金助、西村与八、岩戸屋喜三郎、和泉屋市兵衛、村山源兵衛、大黒屋平吉、伊勢屋利兵衛などの名前が見える。(中井文庫蔵 文政六年刊『忍弾仇夕汲』所収)



部分拡大



図3 『朧染浮名之色衣』巻末
国会図書館

この役を演じた市川銀兵衛生没年未詳は、五代目市川海老蔵(前名七代目市川团十郎)の門弟。この時期五代目は三座類焼をうけて、上方へ上がり、江戸を留守にしている。

『歌舞伎俳優名跡便覧』第五次修訂版によると、文政七年(一八二四)十一月から市川銀兵衛を名乗り、天保九年(一八三八)三月箱猿、弘化四年(一八四七)十一月に箱右衛門と名乗っている。俳優は箱虎、箱猿。

文久刊三代豊国画『増補古今俳優似顔大全』の「市川家成田屋門葉附録」に、「局女郎おとら 市川箱右衛門」で「同七代目白猿門人初名銀兵衛俳優名箱猿箱虎」云々とあり、嘉永元年(一八四八)十一月頃からその名が見えなくなるようである。

銀兵衛時代は、舞台図以外に文政期の『三賀之津俳優素顔夏富士』下や『三都俳優水滸伝』三編上にその姿があり、天保十一年(一八四〇)役者評判記『役者金剛力』半道敵之部に「頭取」箱猿の湯桶読みは名ばかり聞てもおかしくムリ升「芝居好」常から酒がすき故か生酔のくせが妙で、どうか熟柿のにはひがするやうに、おもはれ升。

「する事なすくすぐつたいやうに笑はせるも、また一流なものでゐる」と評されている。

この評判は、戯画である嘉永元年（一八四八）頃国芳画「荷宝蔵壁のむだ書」に「さけがみてへ」、「道外見富利十二志」には、「申」に「へやれくむまいくこのさけを一ぱいのんだら、むねがぐつとすいてきたへア、いさけじやへエこれ、ついでにちろりをみてたもれへいゝかんしや、エ、のどがぐびく」と書かれており、世に酒好きで知られていたのがわかる。この図4には他に、「酉」（坂東しうか）、「戌」（八代目市川団十郎）、「亥」（五代目沢村宗十郎）の三人の姿があり、一見するだけでわかる身振りで判別できるのだが、「申」についてはいかがであろうか。「申」は身振りではなく、詞章からの判断が必要で、猿がつくという「猿酒」から、俳名の箱猿だけでなく「酒好き」な箱右衛門を描いたと受け取れるかもしれない。



図4 「道外見富利十二志」歌川国芳（一勇斎国芳例の戯画）大判三枚組の内
恵比寿屋庄七 村田・米良 都立中央図書館特別文庫

他に、この時の森田座二番目「花菖蒲浮名顔触」の序幕を描いた三枚続にも、吉原や深川の芸能人、描いた絵師国芳の弟子等の名前などの奉納手拭の中に「仙女香」の宣伝が見える。

描かれた役者と役名は六代目岩井半四郎のげい者おしゅん、四代目坂東三津五郎の白藤源太、五代目松本幸四郎の権助である。

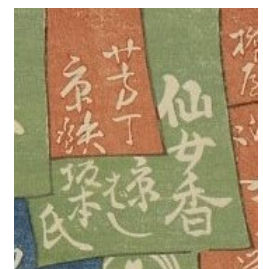
「権助 松本幸四郎」

「白藤源太 坂東三津五郎」

「げい者おしゅん 岩井半四郎」



図5 歌川国芳（一勇斎国芳画）大判三枚続 丸屋清次郎 極 演劇博物館



美艷仙女（せんじょ）香 坂本氏」と役者絵

この上演は、日本大学総合芸術情報センタ―所蔵朱筆書入絵本番付に「二番目は文化七年（一八一〇）、先代三津五郎半四郎にて当てる「勝相撲浮名花触」也。幸四郎の足駄の齒入は初演以来也。」（三月市村座二番目狂言）との記載があり、当り狂言の再演であった。

○天保五年（一八三四）九月森田座「時今出世券」二番目「花川戸名物侠客」花川戸の場
現在確認できる舞台図は二図あり、進物ビラ^④にその名が見える。

図6のビラは、「京ばし南伝馬町三丁目 仙女香 坂本氏」／「三津連」東連「歌楽 由次郎 三考 新孝 善孝」／「米太夫 岡重京鉄」とある。坂本氏の他、四代目三津五郎の最原連、吉原の男芸者と深川で主に活躍する富米米大夫、立川昔咄しの岡重、清元三味線の京鉄の名がある。^⑤ 絵の役者と役名は、四代目大谷友右衛門のうづら権兵衛、嵐冠十郎の寺西かんしん、四代目坂東三津五郎のばんずい長兵衛、市川一友の極楽十三である。次の図7は、「京ばし 南伝馬町三丁目」仙「女香」美「玄香 坂本氏」三連「三津大」連「三津連」／「宝升」東連「キ常」江「戸連」のしびれんで、坂本氏と四代目三津五郎の最原連である。絵の役者と役名は、四代目大谷友右衛門のうづら権兵衛、四代目坂東三津五郎のばんずい長兵衛、沢村訥升の女房おときとなる。

「極楽十三 市川一友」



「ばんずい長兵衛 坂東三津五郎」

「うづら権兵衛 大谷友右衛門」
「寺西かんしん 嵐冠十郎」

図6 歌川国芳(一勇斎国芳画)大判三枚続 太田屋佐吉 極 Victoria and Albert Museum

「女房おとき 沢村訥升」



「ばんずい長兵衛 坂東三津五郎」



「うづら権兵衛 大谷友右衛門」



図7 歌川国芳(一勇斎国芳画)大判三枚続 上州屋重蔵 極 Victoria and Albert Museum

なお、この舞台最初二番目は「千代見草恋中壙」のお千代半兵衛物で、九月十二日付辻番付に載るが、十九日の追番付で「花川戸名物侠客」に変更されている。但し、十三日付の役割番付では既に「花川戸名物侠客」になっている。この間の事情について、天保六年（一八三五）刊役者評判記『役者現銀店』には、「梅我丈御病気ゆへ抛無一夜附にて幡隨長兵衛・」とあり、六代目岩井半四郎が病氣となり、演目が急に変更されたとの記述がある。そのため、「千代見草恋中壙」の舞台図は少ないが、図8に「仙女香」の包み紙が描かれたものがある。歌川国芳画（一勇斎国芳画 川口屋長蔵 極大判）の「当盛三福対」の内一枚「お千代 岩井半四郎」図である。



図8 「お千代 岩井半四郎」
演劇博物館

図9は舞台図ではないが、歌川国芳画「幡すゐ長兵衛 坂東三津五郎」（一勇斎国芳画 大判 江戸屋松五郎か 極）で、最肩筋から贈られたおびただし進物に囲まれる楽屋での四代目坂東三津五郎の姿を描いている。「あづま手拭」「かつみ椎茸」「大和かたまきぎくし」「かつみ海苔」「かつみたば」「きんふら」「東とうふ」「かつみすし」「大和すし」「やまとだんご」「東すし」「しう調好きせる」「勝てらまんちうにしき梅」「三ッ大山（銘茶）」「秀調好巻紙」等等・最肩連の名前を冠した品物や三津五郎好とつくものが多い。各見世の町名も明示する。なかで、「仙女香」の袋が特段に目立っている。絵に描かれた進物を読み込んだ詞章部分は、上下部と左側の「曲笠庵銀河」部分が裁断されているため、たばこと塩の博物館所蔵で補ったが、こちらも上下部が少し裁断されているため、その箇所は□で表示した。不明箇所が多く、史料価値にかけるが、今後完全な資料が出ることを期待する。

「御ひるきは浅香ながらもにしき絵を 勝見る人にねかふあきなひ しう調
□此大和やの親方は、今での「仙女香」取た愛きやうたつふりで、人に逢と□



図9 歌川国芳画「幡すゐ長兵衛 坂東三津五郎」
（一勇斎国芳画 大判 江戸屋松五郎か 極）
個人蔵

のやうに世事て人を丸めて如才かない。そして芝居の休みの内も、ひみき□客の内へ「猪口」く〜と機嫌伺に行から、請かい。此宵の山崎屋狂言の時、東れん見物てひかしの下つかい、夫て棧敷かたらないで、酒も四五軒ほと売れて見た。大そうな「扇」りて人の「鮓」か出来たそうた。□時「おしろい」をしつくいのやうに付けた女も沢山出て、フン〜と「はみがき」の□のかわりて、おつなくしをさしてゐた（評ハ）シリヤわたしが、□じの当時はやりの「大和くし」だ。□□へのおつこちや「まきぎ」も買ふ。□□に「いす」ぞ「つげ」てくんその□□には、「紙よう」たば（こかん）入」と味噌つけの「しいたけ」を上ケやう。ツレはそうと、此度「とうふ」□の連中か出来たじやねへか（ヒ井キ）□賀神奈川越谷大沢へきた□だ。定めて此顔見世には、□見物かあろう三津連と外□□と三所「海苔」に成つて、「酒樽」蒸□を芝居の前に積て、「手拭」も□つひに染て手打も有つもりた。「養老」（評ハ）シハ、其時当るきまつた□□は、ちよつと一筆書てよこしてくんな。富士の「巻紙」しやねへが、背子に□いにきやかにしに連ていかう。此うはさをひみきね（天麩羅）野人か□らは無く。「勝見」あかりになるだろう。そして親方は、此かほ見せが□かい町。「玉たばこ」「きせる」の煙りの吹屋町へは行まいの居なりだ。□木挽町では、袋へ入れた心て居るだろう。当時役者の□撰ッ粉た。
売物に花を集てあつま哉 曲笠庵銀河」

「宿ばのあんま 関歌助」
「大ふくや女房おくら 中山みよし」

「大ふく屋宗六 沢村訥升」「小女 沢村沢平」
「仙女香 美玄香 坂本氏」

○天保五年(一八三四)十一月森田座「花三津雪瑞白石」五立目
この上演では、坂本氏の宣伝文句のはいる舞台図が一図あり、これも葛屋吉蔵版である。(図10)



図10 歌川国貞(五渡亭国貞画) 大判二枚続 葛屋吉蔵 極 ベルリン国立アジア美術館

役割番付に「仙女香の旅商人坂本伝六 山科甚吉」の記載があるが、甚吉(四代目?)を描いたものは見つからない。

役者・役名は、沢村訥升の大ふく屋宗六、沢村沢平の小女、関歌助の宿ばのあんま・中山みよしの大ふくや女房おくらである。

画中文字は、

「沢平 申旦那様。江戸から仙女香のおしろいが参り升た」訥升 ヲ、此間江戸の便りにたのんだ、京ばしの仙女香。うり物には、花とやら歌にもうたふ岡崎でもよいが、うへにもよい女郎と、江戸にもまさる大ふくや、しろものが大事だ。此仙女香のおしろいで、随分ときれいに化粧してくりやれく」／歌介 いかさま所の風とはいふながら、吉田でも岡崎でも、ひるは女郎衆、夜にいれば仙女香のおしろいだけわけせうでぬり立て。岡崎女郎衆はよい女郎衆く」

第三章 文政六年(一八二三)市村座でのキャンペーン

このように森田座での披露目のキャンペーンを行った坂本氏は、文政六年に初めて披露目を市村座舞台で行ったとされている。「橘中の座でひろめたる仙女香」という句が『柳多留』88(文政六年十二月判、種彦判、戯場一題 井譬喩)に在る事が指摘されており、この句は中国の伝説の橘中仙の橘に市村座をきかせ、劇場で披露目が行われたことを暗示しているとされる。^⑥

上掲の句は文政七年(一八二四)刊「花暦 八笑人三編追加」にも取り上げられており、「年々歳々流行さかんなるものは、八笑人と仙女香。柳亭先生の撰まれし芝居川柳の句に、橘中のなかでひろめし仙女香」と紹介され、「その秀句にはちらず、此所に余紙あれば、顔の色羽二重」の仙女香ちりめん皺も見せぬおしろい 南仙笑楚満人即戯」とある。

だが、今のところ森田座と違い、役割番付にもそれらしき商人名もなく、舞台図も鳥居に「奉納 南伝馬町いなりしん道 美艶仙女香坂本氏」とある図11のみしか現在の処見っていない。

文政六年九月市村座「御ぞんじ松竹梅」二番目「造物梅の由兵衛」の舞台で、役者・役名は、七代目市川团十郎の金谷金五郎、三代目尾上菊五郎の梅のよし兵衛、

「女房小梅 瀬川菊之丞」

「梅のよし兵衛 尾上菊五郎」

「金谷金五郎 市川團十郎」



図 11 歌川国貞(五渡亭国貞画) 大判三枚続 山口屋藤兵衛 極 阪急文化財団池田文庫

五代目瀬川菊之丞の女房小梅である。今後の新資料が出ることを期待する。

舞台図はこの図以外見つかからないが、この当時(文政五〜七年頃)から、役者作の合巻に坂本氏を宣伝広告する場面があるものが散見されているので、少し取り上げて見たい。

第三章 役者合巻

第一節 七代目市川團十郎役者合巻

三冊とも後編巻末に当たる場面になる。版元は文政五、七年刊山口屋藤兵衛、文政六年刊西宮新六だが、両方とも蔵版目録に坂本氏の宣伝が入っている。

文政五年刊『瑠璃紫江戸朝顔』当春御披露仕候、南伝馬町三丁目稻荷新道美艶仙女香。過日繫昌仕難有仕合奉存候。尚又此上、御評判宜御求可被下候(図12)

文政六年刊『一番太鼓春の曙』：猶又是迄、みな様へ御ひろう仕りおきましたる、京ばし南てんま三丁目いなりじん道坂本氏にてひろめ升ル、仙女香御かほのくすりの義、外との品とはかくべつの効能、御用ひ御ころの御方は、ご存じながら猶も、御ひいき御用向願上奉り升ル：(図13)

文政七年刊『江戸錦双蝶曾我』御ひろう申上まする、御かほのくすり美艶仙女香。一つみ四十八銅、いろをしろくし、きめをこまかにす。にきび、そばかす、できものゝあとをなほし、しぜんと御かほつやゝかになる。ありふれたる顔のくすりとは、ことに格別の品なり。御つかひくらべ、御用被遊可被下候。南てんま三丁目いなりしん道いなりの東となり、坂本氏(この場面の六人は、以下の通り。「おめでとうぞんし奉ります」と前面に平伏する二人は、羽織の紋から絵師の国貞と国直、後方は七代目市川團十郎、代作の五柳亭徳升、国直門人直定直貞だが、中央の人物は情報がなく不明。坂本氏の可能性があるだろうか(図14)

この三冊を比べると年代が下がるほど、詳細な広告になっているのがわかる。

なお、『一番太鼓春の曙』早稲田大学図書館蔵)上編巻末に「取次」一覽前述に取り上げたものと内容同じものだが、後印)と団十郎の口上図が添付されている。(図15)落款から、二代豊国と考えられ、美玄香の宣伝がないことや住所から、文政九年(二八二六)頃かとする、後に貼られたものようである。同じ頃刊行『情競傾城富』(坂東秀佳作 歌川国安画 鶴屋喜右衛門)⑦巻末にも、三代目坂東三津五郎による



図 12 『瑠璃紫江戸朝顔』(文政 5 年刊)
早稲田大学図書館



図 13 『一番太鼓春の曙』(文政 6 年刊)
早稲田大学図書館



図 14 『江都錦双蝶曾我』(文政 7 年刊)
国会図書館

図 16 も、文政ではなく天保に入るものになるが、口上図になるので参考に掲げる。
『口上茶番早合点』五柳亭徳升戯述 香蝶楼国貞画 川口宇兵衛が天保五年に刊行
されており、その影響があるとするこの口上図も其のころになるであろうか。なお、
この図も萬屋吉蔵版である。

図 15 の口上は、
「乍恐口上書を以奉申上候
一 御一統様益御機嫌克被遊御座。恐悦至極奉存候。先達而御披露奉申上候。江
戸京はし南伝馬町三丁目いなり新道いなり東隣、坂本屋三而売弘められ升る美艷仙
女香と申顔の妙薬。御ひるき御蔭を以、近日繫昌仕、難有仕合奉存候。尚又此上御
評判益御求被遊被下置候様、偏奉希上候已上。 七代目三升」
である。



図 15 『一番太鼓春の曙』
早稲田大学図書館

「東西く作者口上」として、「一 京ばしいなりじん道坂本と申かたにてうりひろめ
升ル御かほのくすり、あいかわらず御用向おふせつけられ升ルやう、八百八丁のすみ
からすみまで、ずらりつと申あげたてまつります。そのため口上さやう」があり、
続けて役者連による坂本氏の宣伝が行われていたようである。特に坂東三津五郎家
は天保二年(一八三一)に没した三代目に続き、前述の天保五年(一八三四)の舞台図
等と四代目も関りが強かったと思われる。



図 16 「口上茶番 六歌仙 景物 仙女香美玄香 坂本氏」
歌川国貞(香蝶楼国貞画) 横大判 蔦屋吉蔵 極 個人蔵

画中文字は、(口は□で代替)「いろ見へうつろふものは世の中の人のこころの花にぞありけりとは、実にこの仙女香。一度化粧被遊婦人がたは、「小町」のごとく、雪のはだへに花のかほばせ。此おしろいをあけくれお用ひなさるれば、おもかげのかはらで年のつもれかし、たとへ命のかぎりあるとも、おかほに少しのしはだに見せず。そこで、美艷仙女香と名づけました。さればこそ、名にめでと折るばかりそおみなへし われ落にきと人にかたるな。かの「僧正扁照」も見とれて、さが野で落馬いたされたさうに御坐ります。又この美玄香と申は「大伴黒主」たきこるしづの男ば、あたんの翁たりとも、この黒油にてかみをすくときは、忽みどりの黒髪となり。鏡山いざ立よりて見てあれば春やむかしの春ならん わか身ひとつは元の身にして「在原業平」か初冠のごとし。そこでわかいほは、大江都の辰巳に当て、よを宇治山の坂本氏。見世先は「喜撰」群集致します。いづれもさまこれで一ツべて被下ませといふとき、「側半畳」それでは六歌仙に一ツたりません。ハテ不申共、売ものが文屋(ぶんや)、第一が「康(やす)秀(ひで)」で御坐ります。市川海老蔵述(天保三年(一八三二)三月七代目市川団十郎から

五代目海老蔵に改名

引用した和歌をあげる。

小野小町

「色見えて移ろふものは世の中の

人の心の花にぞ有りける」

「おもかげの変らで年のつもれかし

よしや命にかぎりあるとも」

僧正扁照

「名に愛でて折れるばかりぞ女郎花

われ落にきと人に語るな」

大伴黒主

「鏡山いざ立ち寄りて見て行かむ

年経ぬる身は老いやしぬると」

在原業平

「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ

わが身ひとつはもとの身にして」

喜撰

「わが庵は都のたつみしかぞ住む

世をうち山と人はいふなり」

従来、美艷仙女香の「仙女」は瀬川仙女(前名三代目瀬川菊之丞通称仙女路考 文化七年(一八一〇)没の名前から由来すると云われてきたが、上記の文面に「この仙女香、一度化粧被遊婦人がたは「小町」のごとく、雪のはだへに花のかほばせ。此おしろいをあけくれお用ひなさるれば、おもかげのかはらで年のつもれかし」とへ命のかぎりあるとも。おかほに少しのしはだに見せず。そこで美艷仙女香と名づけました」とあることを指摘しておく。

五代目海老蔵の場合、七代目団十郎時代から、他の菓の広告や物売姿で描かれた口上図が散見されており、依頼されれば宣伝に一役買っていたようである。坂本氏の

広告の場合、最初からかなり積極的に関わってきたことがうかがえるのではないだろうか。門弟銀兵衛が天保五年（一八三四）森田座で仙女香売をつとめたのも、役柄もあつたであろうが、こういう関係から来ていると考えられようか。

第二節 五代目瀬川菊之丞作役者合巻

文政六年（一八二三）刊『須磨浦の濡事新口村の愁嘆 忍弾仇汐汲』があり、三の巻巻末と後編の巻初に坂本氏の広告が入るが、文中ではないので、菊之丞関与というより、版元の意向の方がうかがえる。ただ花咲一夫氏が指摘する『馬琴日記』に、「文政



図 17 文政6年刊『須磨浦の濡事新口村の愁嘆 忍弾仇汐汲』中井文庫

十年十月七日 昼後、和田源七来ル。美玄香とやら売葉。弘メ候由ニテ、合巻三書入被下得と之頼也。・」^⑧とあるので、作者によっては依頼に源七は足を運んでいたようである。源七については後述する。

広告には、「御ひろう」御かほのくすり 美艶仙女香 一つみ四十八銅 いろを白くしきめをこまかにする大きくなり。十包以上御もとのめの方へは、役者自筆の扇子、御このみ次第奉遣候以上。弘所江戸南てんま町三丁めいなり新道坂本氏」と、提灯に「京橋坂本氏 御かほのくすり 仙女香」という宣伝文句の記載である。

第四章 坂本氏の仕掛人

第一節 鈴木町名主和田源七

ところで、取次というネットワークを構築し、江戸各地だけでなく全国各地へも発信もし、文政四年（一八二二）頃から天保十三年（一八四二）頃まで、錦絵や版本類に宣伝広告を多数継続して出せた坂本氏とはどういう人物だったのだろうか。

実は、この坂本氏の背後にあつて、実質的経営者とされる人物として、鈴木町名主和田源七を『馬琴日記』や『藤岡屋日記』などから、花咲一男氏がすでに指摘されている。^⑨

名主和田源七は役儀として長らく出版関係改役を勤め、源七の役歴について詳細に報告された湯浅淑子氏によると文化十年（一八一三）には「三狂言座 操座家作取調掛」に任命され、歌舞伎界や浄瑠璃界にも関係を持つようになったという。^⑩源七は出版界だけでなく、演劇関係にも関りを持つ立場に居る人物だったようである。

前述の森田座での銀兵衛の口上せりふ中の、「おかほのくすりの景物に、十包以上おもとめなされば、半四郎でも坂三津*でも、好なやくしやの自書の扇さし上上げるが、家のかぶ*（*六代目岩井半四郎、四代目坂東三津五郎）というせりふは、広告宣伝文「右の御くすり十包以上御もとのめ被下候はゞ、当時三芝居立者立役女形正めい自筆の御扇子けいぶとして、差上申候間、十包以上御求め被遊候節は、御好の役者名前御しるし御こし可被下候。其品差上候」を踏まえたもので、広告する最初の宣伝文句から記載されており、役者連とのつながりがうかがわれる。

この景物扇面はなにかの貼込帖に残されていないであろうか。報告を俟ちたい。湯浅氏は、源七の生年を安永二年（一七七三）の生まれで、没年は天保十四年（一八

四三)八月と調査¹²⁾されており、そうすると、宣伝広告が出るようになった文政五年(一八二二)頃は四十代後半か五十代に当たる。

加藤貴「名主役料からみた江戸の地域構造」『歴史地理学』¹²⁵ 一九八〇に「江戸の名主は名主役専業で、御用達商人以外は他の商工業を兼業することができなかった。そのため、名主は支配町々から徴収する役料を主な収入としていた。」とあり、名主であった源七は商売を表だてでできなかったはずである。

天保二年(一八三一)三廻り同心により、「…一体貧乏之處、近頃少々取直候様ニ相聞申候」市中取締類集「名主取締之部」という報告が出されていることも湯浅氏は指摘しており、¹²⁾生活は困窮していたのが近年持ち直していたという。それに従えば、背後から店の宣伝や広告につとめ、その見返りで潤ったということになろう。

その三年後、森田座によるキャンペーンと同じ頃の天保五年(一八三四)十月に、和田源七は富岡八幡宮境内に「和田氏歴世記碑」を建てており、和田氏の出自と経歴がわかる。天保五年は源七にとっても特別な年に当たっていたようである。

今回、この碑については、江東区教育委員会によって、『江東区の文化財』4門前仲町界限(二〇二三)の件に以下の様に紹介されているが、既に明治三十年(一八九七)『新撰東京名所図会』8(深川公園の部)にも取り上げられている。

「本碑は、和田氏の子孫和田源七が天保五年十月に建てたもので、正面碑文には、先祖の来歴が刻まれている。概略は次の通り。

私の先祖は、大和田清左衛門で、摂州の西生郡(大阪府)の人であり、慶長年間に数十艘の漁船を使って徳川方の軍用資材を運んでいた。その後、江戸に移り、関東八州の漁師の管轄を命ぜられ、小田原に屋敷を与えられた。四世の孫浄麟のとき、明暦の大火(一六五七)で朱印状などを焼失し、屋敷を取り上げられた。その後、姓名を下田と改め、魚問屋となり、再び和田姓に改めた。

背面の刻面から、正面の「和田氏歴世記」の文字は岩瀬百樹(山東京山)の書であることがわかる。和田氏歴代の墓は、長専院(三好一ノ六ノ三)にある。」

これらの記載は、碑文の前文に当たるので、史料として載る全文から関係する箇所のみ、以下に掲げる。

「…後遇赦改号大和田有鈴木甚「太」／夫者為鈴木街坊正……寛文辛丑讓職於甚兵衛甚兵衛復以和田為氏」…鈴木氏為靈巖島白銀街坊正。鈴木孫市義子襲称源七。妻以明和庚寅卒。源七以天明丙午卒無子以三郎次者為嗣、為娶炭街土屋利

兵衛女。三郎次原姓今井氏為熊谷駅今「井」四郎左衛門第四子、実余之考也」…七街坊正以至於「今」矣。余以不肖為後嗣乃略記歴世相統之由。以諒於後若其生卒月日則具於別籍云「天保五年歲次申午十月上澣 裔孫和田源七朝盈記 梧堂石川用書」

* 石川梧堂(安永七年(一七七八)〜嘉永五年(一八五二))は、旗本で、書家として有名。総氏系石川家保久石川家六代。

京山の撰文は中国風なので、少しわかりにくいだが、和田源七(何代目か不詳)が明暦の大火以降名主の家柄で有ることがわかり、鈴木から和田氏に名前を改名していることもわかる。源七は碑文によると、養子で熊谷宿今井家出身だったようである。前面には坂本氏との関りの記載がないが、背面に「建碑輔弼 仙女美玄二香祖鋪坂本氏」とあり、碑を建てるのを助力補佐したのが坂本氏と判明する。碑は安山岩で、高さは167.3 cmもあるものであり、書家の梧堂や京山と有名人に依頼もしていることから、多大な費用もかかったと考えられ、坂本氏との関係性もうかがわせるものである。ただこれらからは、具体的な関係については不明である。

源七が没した後坂本氏の店は存続しており、葺屋吉蔵の新春蔵版目録の嘉永頃にも取次の記載がある。ただ、仙女香の宣伝は減り、後摺本には削られたものがあることも報告されているが、天保九年(一八三八)『店三絃緒連弾』改題本嘉永六年(一八五三)再印の『高尾年代記』は同じ丁の絵師、作者名部分は削られ改刻されているにもかかわらず、美艷仙女香黒油美玄香坂本氏の宣伝部分はそのままになっているものもある。(長田和也氏御教示。『和本図譜』日本近世学会編 文学通信 二〇二三)

明治以降「仙女香坂本商店」と名乗り、「国産洋傘のバイオニア」として有名で、五代目坂本友七後友寿(弘化四年(一八四七)生)から六代目友七(明治五年(一八七二)生)¹³⁾へと手広く商売を広げている。坂本氏は、白粉や白髪染以外に文政十年(一八二七)頃から手掛けていた晴雨両天傘という晴雨兼用傘も販売していることが知られており、その技術と知識を援用して、輸入洋傘を模して国産洋傘が作成できたのであろう。戦前まであったという。ところで、五代目が弘化四年(一八四七)生ということは、源七と組んでお店を開いていたのは、三代目か四代目であろうか。

源七は役儀を利用した目立つた行動により、『藤岡屋日記』天保十三年(一八四二)に「…仙女香の見世を出し置き、絵草紙懸也」とか「市中取締類集」天保二年(一八三

一)にも「：仙女香と申化粧二相用ひ候薬を商候由：」⁽¹⁴⁾と記載され、明治三十四年(一九〇二)刊『新撰東京名所図会』京橋之部巻之三や同『東京名物詩』にも同様な記述があるとのことである。⁽¹⁵⁾

第二節 為永春水とその仲間

文政五年(一八二二)頃からの合巻に、挿入されている坂本氏的美艷仙女香由来の能書全文は、ほぼ次の通りである。

「御かほの妙薬 美艷仙女(びえんせんじよ)香(かう) 一包四十八銅 此御くすりは、享保十一年二十一番の船主、伊孚九といへる清朝人、長崎偶居の時、丸山中の近江屋の遊女菊野に授たる顔の薬の奇方なり。伝ていふ、清朝今のからにて宮中の婦人常に此薬を用て粧をかざるとぞ。習の伝方故あつて予が家に伝へたるを、此度世に弘るもの也。今世上に顔のくすりと称するもの、あまたありて、色はいづれも初霜のおきまどわせる菊なれども、家方の妙薬は別種の基劑されば、世上の顔の薬と二(ひと)列(つら)に下(み)看(み)なし給ふ事なかれ。

効能 御用ひやう水にてときつくべし。

▲常に用ていろを白くしきめをこまかにす。▲はたけそばかすによし。▲できものゝあとをはやく治す。▲いもかほに用てしぜんといもを治す。▲にきびかほのできものに妙也。▲はだをうるほすくすりゆゑ常に用れば、年たけても顔にしはよることなし。▲惣身一切のできものによし。▲ひぐたむしうるしかぶれあせにも妙也。股のすれに付てよし。▲かみそりけぬきかぶれによし。▲蚊のミ喰跡に付てよし。▲櫛すれ枕すれによし。

調合売所江戸京ばし南てんま町三丁目 いなり新道いなりの東となり坂本氏

口上 右のおくすり十包以上御もとめ被下候へ、当時三芝居、立役女形、正めい自筆の御扇子、けいぶつとして差上申候間、十包以上御もとめ被遊候節は、御このミの役者名前御しるし御し可被下候。其品差上申候。」

この宣伝文中に、「此御くすりは、享保十一年二十一番の船主伊孚九といへる清朝人、長崎偶居の時、丸山中の近江屋の遊女菊野に授たる顔の薬の奇方なり。」とあるが、享保十一年(一七二六)は文政五年頃からほぼ百年ほど前に当たる。「伊孚九(いふ

きゅう)(一六九八〜一七四七?)は実在の人物で、長崎に何度か来航した貿易商で、余技に南宗画に長じ、当時の知識人に高く評価されたという。『伊孚九池大雅山水画譜』享和三年(一八〇三)刊も刊行されているが、当時では一部の人たちにしか知られていない人物と思われる。特に「享保十一年二十一番の船主」という記述については典拠不明であるが、伊孚九については、寛政九年(一七九七)『好古日録』末に記載がある。それには「百十七 伊孚九 伊海父賞、海外三貿易ス。一夜、東海洋中ニシテ男子生ト夢ム。家ニ還レバ妻男子ヲ安産ス。即感夢ノ夜也。故ニ海ト名ツケ孚九ト字ス。享保十一年廿八番ノ船ニ乗ジテ、始テ長崎ニ来リ、延享中ニ至リ廿余年ノ間往来ス。其写ス書画世上三賞セラル。最風韵アリ。印行喰嚙録海書スル所也。欧法愛スシ」(『日本随筆大成』一ノ二十二「吉川弘文館」とある。「二十一番」と「廿八番」という違いがあるが、ここらあたりを典拠としているであろうか。この本は当時の知識人に愛用されたという。又、関係あるかわからないが、文政五年春頃から「唐人踊り」(かんくのう)という見世物が流行つたという。隣国清に興味が集まり、渡来した化粧品に結び付け、話題性をねらった可能性についてはどうであろうか。

なお、坂本商店の広告『東京案内』下巻広告 明治四十二(一九〇九)⁽¹⁶⁾に、「文政年間三開業ス」という文面があるので、古い店ではないのがわかり、秘伝を伝えてきたというが、この時期まで販売しなかったのはいぶかしいことであるので、能書は創作されたという疑問符が付される。

これらの知識があり、広告文を作成することができ、役者自筆の扇を景物とする企画を立案できたのは、名主和田源七とは考えにくいのではないだろうか。ほかに依頼された人物の存在がうかがえるのではないだろうか。

文政五〜七年頃の刊行物から浮かび上がる人物の一人に為永春水がいると考えられるのだが、今回は本題を離れるので、幾つか事例をあげるのみにとどめ、今後の論議に期したい。

為永春水(寛政二年(一七九〇)〜天保十四年(一八四三))は屋号越前屋、通称長次郎。二十五歳ごろ書肆青林堂を経営し、式亭三馬の門人となり、振鷺亭の跡をつぎ二世と号した。教訓亭為永とも、二世南仙笑楚満人とも名乗っている。柳亭種彦にも近づき⁽¹⁷⁾、歌舞伎界とも近しかった。

井上隆明著『江戸コマシヤール文芸史』(高文堂出版社 一九八六)には、春水が「処女香」「丁子車」「初みどり」を春水製剤として広告文を作成している事実を記述して

いる。

天保十二年(一八四一)『春色伝家の花』¹⁸⁾に、

姿は見えねど、暗闇にても隠れはあらぬ、梅が香の薫りに勝る仙女香の化粧の匂ひほのめきて、肌にはたしか花橘、処女香(むすめかう)の効能深く、口にくみし梅の雪、ゆかしき常の身たしなみ、真の美人と賞すべし。因によつて、今右にしろす薬は、女中衆の常に用ひたまねばならぬ化粧の品、又たしなみの妙薬なり。

○美艷仙女香当世白粉の第一番 南伝馬町 坂本氏製

○御化粧水花橘 硝子入 小伝馬町 丁子屋 店

○おしろい下肌のくすり 処女香 しぜんといろの白くなるみやうやく 弥左衛門町 大島屋

○御懷中たしなみ薬梅の雪 小伝馬町 丁子屋

という宣伝を載せている。版元大島屋伝右衛門と丁子屋平兵衛で売りさばっていた化粧品類は春水が関わっていたことは既に記したが、この文面では仙女香も同列に扱っているのがわかる。文政四く七年頃の春水は書肆青林堂を営み、二世振鷺亭や二世南仙笑楚満人と名乗り、執筆をしている。此頃の人情本や滑稽本の作中に、春水の親戚筋と云われる瀧亭鯉丈と共に刊行したものの中に、巻末の広告ではなく、坂本氏宣伝を作中人物に語らせていたり、特別に取り上げていたりする。他の場合と比べて、より宣伝に努めた感じがするのである。幾つか事例をあげる。

〔事例〕

○文政五年(一八二二)この時期は、貼付や挿入になる。

瀬川如臈著『木曾義仲鼎臣録』英泉画 青林堂越前屋長次郎 文政五年 貼付

「御かほのくすり 美艷仙女香 このくすりは、享保十一年二十一番の船主伊孚九といへる唐人長崎偶居の時、丸山の全盛中近江や菊野と称せし遊女に受し、奇代の妙やく也。効能は包紙*にくわしくしるす。○十包以上御もとめ被下候ば、三芝居役者自筆の扇景物にさし上候。御用のせつは、御ひみきの役者名前御好被可成候。調合弘所 江戸南伝馬町三丁目いなり新道いなりの東となりにて さか本氏製」

*この包紙は、「江戸時代賣薬広告引札貼込帖帖」(都立中央図書館蔵 特五一九)、「江戸期白粉包紙集」ポラ文化研究所に所収

○文政六年(一八二三)

楚満人門人駒人著『紀文大尽全盛葉南志』上 英泉画 文政五年秋序 文政六年 青林堂

この人情本は、向井信夫氏によれば、新板を装っているが、刊年不明の故人振鷺亭作『夕霧一代記』の改題後摺本。このあと、版木が上方へ移り、『全盛貞女夕霧物語』と改題される。『江戸文藝叢話』八木書店 一九九五)こちらには、「崎陽丸山の遊君清人伊孚九より 美艷仙女香の秘法を授る濫觴」とある一丁分は削除されている。

「崎陽丸山の遊君清人伊孚九より 美艷仙女(せんじょ)香の秘法を授る濫觴(おこり)」

「此御くすりは、享保十一年二十一番の船主伊孚九といへる清朝人、長崎偶居の時、丸山中の近江屋の遊女菊野に授たる顔のくすりの奇方なり。伝て云、清朝今のからにて、宮中の婦人此くすりを用ひて、粧ひをかざるとそ 溪斎画」

「御顔の妙薬 美艷仙女香 一包四十八銅 上に述るごとくの伝方、故あつて予が家に伝へたるを、此度世に弘むるもの也。今世上にかほのくすり」と称するものあまたありて、色はいづれも初霜の置きまどはせる菊*なれども、家方の妙薬は、別種の奇劑なれば、世上のかほのくすりと一列に下(み)看(み)なし給ふことなかれ。

効能 ○用ひやう 水にときつけてよし。▲常に用ひていろを白くしきめをこまかにす。▲はたけそばかす田むしによし。▲にきびかほのできものに妙也。▲はだをうるほす薬ゆゑ常に用ゆれば、としたけてもかほにしはのよることなし。▲惣身一切のできものによし。▲ひゞあかぎれあせもによし。股のすれにはすれる所へすりつけてよし。

調合売弘所 江戸京橋南てんま町三丁目 いなりじん道いなりの東となり 坂本氏(印)

右の御くすり、十包以上御もとめ被下候はゞ、当時三芝居、たてもの立役女

形、正めい白筆の御扇子けいぶつとして差上申候間、十包以上御求め被遊候せつは、御このみのやくしや名前御しるし御こし可被下候。其品々差上申候。」

*「心あてに折らばや折らむ 初霜のおきまどわせる白菊の花」凡河内躬恒『古今集』

瀧亭鯉丈戯作『柳髮新話浮世床』三編中巻 英泉画 文政六年 鶴屋金助・越前屋長次郎・堺屋国蔵合版

「コウく白粉といへば南伝馬町の仙女香は。奇妙だぜ。盲「こうなんぞは。あれを用いれぱい。菊石が直る程だから凸凹も。ちつとは。てへらに成るだろう。」(略)「ぜうだんはおいて。近年は。さまぐな白粉や。顔の薬が出来たそふだて。おらが娘の奉公先からも。ヤレ何処のうがい。の。それ。其処のがい。のと。イヤ使のたんびに。買所がちがつて。扱とるせ「事ヨ。惚「モシ今のはなしのは。実によふござへす。わたし等は。顔に用はねが。総身の種物ひざあかぎれ。あせも。イヤ股のするなぞには。奇代。そして一ト包五十だが。拾包からは。三芝居の立テ物手合。だれでもこつちのぞみ次第の。正筆の扇を。景物によすから。おやしき方への。つかひものには。一トしほ妙サ 隠「フム成程手を尽した世の中たゾ。代物をよくした上ておまけが。つくそれでは。はやりそふなもんだ。ちつともふけて。たと売気だ。そりやア何処で売やす 惚「エ、南伝馬町三丁めの稲荷新道で。仙女香と聞と直知れやす。稲荷様の東隣さ。へん何もこんなに脾の腹もんで。おしへる訳もねが。此様サ。いゝおしろひは。女中方の。ためになる事だから。どうぞ弘めて。年中女に苦勞させる。つみほろぼしに。なろふと思つて」

○文政七年(一八二四)

南仙笑楚満人・瀧亭鯉丈合作『浦里時次郎 明烏後正夢』五編中 巻之十四 英

泉画 文政七年 青林堂

「..:はやくよこしておくれと そふいつて来やそれから其序にの店へいつて仙女香おくれといつて一包かつて来な。又道草をくつて遊んで居めへよ。今一人のおみつ「コレサお里さんその仙女香とやは何の薬だ。又一人のおちよ「ヲやお光さんおめへまたしらねか。此あいた流行もので、とんだよくきく薬白粉の事サ。

わつちやア、お里さんにおそわつてから、買って付るか、第一きめをこまかにして、顔の出来物やにきびそばかすなんぞにやア、誠に奇妙だよ。これく爰に包んだ紙が有るが、これを読んで見な。おみつ「どれく、オヤ何だと。御顔の薬美艶仙女香一包四十八孔。この御薬は享保十一年二十一番の船主伊孚九といへる唐人長崎偶居の時、丸山の全盛中近江屋菊野と称せし遊女にさづけし奇代の妙薬也。ヲヤ、おそろしく六ヶ敷事か書てあるよ。そんならわたしもかつて付て見ようよ..:」

南仙笑楚満人序 瀧亭鯉丈作『滑稽牛嶋土産』英泉画 文政七年 双鶴堂鶴屋金助・文永堂大島屋伝右衛門・青林堂越前屋長次郎
中の巻見返

「申ノ卯日附

正大 三日十五二十七、二天 九、廿一、三三、十五、廿七、四十、廿二、
五大 五、十七、廿九、六十、七、七六、十八、八大、一、十三、廿五、
八壬 七、十九、九大、二、十四、廿六、十八、廿、十一大、三、十五、廿七、
十二大 九、廿一、

新玉の年立かへる春の旦(あした)の初卯詣は、年毎のことながら貴賤の群集引もきらず、江戸芸者はいふも更なるはで姿。やしきも町もおしなへて、化粧は名に負ふ仙女香。粧ひかざりて出かければ、往来人(みちゆくひと)のあだ口に、イヨやまくとほめ詞は、彼李(か)園(き)ぶき役者の杜若(とじやく)をさすか、又は此白粉の売の事の多をいふか。彼は亀井戸に聞ふる生たて(且おやま、これは京橋に名高き坂本氏。いづれも当時の流行は、五分もすかざるお女中方。皆御存の仙女香、此白粉は粧ひては、崑崙(くろんほう)よりつりをとるべき生(うまれ)質(つき)のお方でも、忽変る仙女の姿。極上と無類飛切の位にいたらんこと。奇妙との妙義さまの御利正にさも似たる、此妙薬の利目をば爰に用ひて、三みつ(扇(あぶぎ)末広がり)に商ひの、栄(へん)ことを岩井(いわゐ)つ、頼にまかする卯の日附。こも亀井戸の大和屋にゆかりの文を、杜若(かきつばた)元より美艶の白粉に、丁子車のかほりをそへて、益繁昌せんことを余慶のしことにこひねがふ。其口上を宣るものは、東都の戯作者 南仙笑楚満人(花押)」

似顔は、五代目岩井半四郎。

定紋は丸に三ッ扇、替紋は杜若、丁子車。



図 18 文政七年刊『牛嶋土産』

国会図書館

終わりに

美艷仙女香と坂本氏は、種々論議があり、見落としたものも多数ある。今回取り上げた役者絵類もほんの一部であり、課題も多く残る。今後の研究報告を俟ちたいと思う。

今は亡き鳥居秀男氏、増井美知子氏の御教示に感謝したい。小池章太郎氏にも格別な御教示を頂いている。赤間亮氏、湯浅淑子氏、吉田和代氏、中村恭久氏の御協力にも感謝する。久保田知子氏にもお世話になり感謝申し上げる。

掲載許可をいただいた各所蔵機関にも御礼を申し上げます。

〔注〕

- (1) 花咲一男「坂本氏・仙女香図説」『化粧文化』4 ポーラ文化研究所 1981)・「仙女香図説 補遺」『化粧文化』18 1988)・「仙女香の広告文学」『化粧文化』25 1991) 湯浅淑子「仙女香と出版物の改掛」『徳川幕府と巨大都市江戸』東京堂出版 2003) 井上隆明著「江戸コマーシャル文芸史」(高文堂出版 社 1986) 渡辺信一郎著「江戸の化粧」(平凡社 2002) 武藤元昭監修

美艷仙女(せんじよ)香 坂本氏」と役者絵

- (2) 越俊介編著「人情本入門」(花鳥社 2024)等
湯浅淑子「仙女香と出版物の改掛」『徳川幕府と巨大都市江戸』東京堂出版 2003)
『修紫田舎源氏』編上、十四編上、十五編上
(3) 花咲一男「仙女香の広告文学」『化粧文化』25 ポーラ文化研究所 1991)
(4) 中村恵美著「市川団十郎家蔵・安宅松すし」『八代目市川団十郎画像資料集』A 2024)
(5) 神田由築「江戸の音曲文化」『国立歴史民俗博物館研究報告』222 2020)
(6) 西原柳雨編「川柳江戸歌舞伎」春陽堂 1925)、小池章太郎著「考証江戸歌舞伎」三樹書房 1979)
(7) 花咲一男「坂本氏・仙女香図説」『化粧文化』4 ポーラ文化研究所 1981)
(8) 花咲一男「仙女香図説 補遺」『化粧文化』18 ポーラ文化研究所 1988)
(9) 花咲一男「仙女香図説 補遺」『化粧文化』18 ポーラ文化研究所 1988)
(10) 湯浅淑子「仙女香と出版物の改掛」『徳川幕府と巨大都市江戸』東京堂出版 2003)
(11) 湯浅淑子「仙女香と出版物の改掛」『徳川幕府と巨大都市江戸』東京堂出版 2003)
(12) 湯浅淑子「仙女香と出版物の改掛」『徳川幕府と巨大都市江戸』東京堂出版 2003)
(13) 氏名、生年は名古屋大学「人事興信録」データベースによる。代数は、小宮商店 E.D. (二〇二四年七月十四日現在)
(14) 湯浅淑子「仙女香と出版物の改掛」『徳川幕府と巨大都市江戸』東京堂出版 2003)
(15) 花咲一男「坂本氏・仙女香図説」『化粧文化』4 ポーラ文化研究所 1981)
(16) 花咲一男「坂本氏・仙女香図説」『化粧文化』4 ポーラ文化研究所 1981)
(17) 武藤元昭監修 木越俊介編著「人情本入門」(花鳥社 2024)
(18) 武藤元昭監修 木越俊介編著「人情本入門」(花鳥社 2024)・松永瑠成「大島伝右衛門と池田屋一統」(売薬「処女香」を端緒として)『出版研究』50 日本出版学会 2019)

〔図版出典〕

- 図 1 個人蔵
「鏡山行列之図」歌川国貞(香蝶楼国貞画) 大判三枚続の内 鶴屋喜右衛門・西村屋与八 極
- 図 2 個人蔵
「仙女香の商人箱虎」市川銀兵衛 歌川国貞(五渡亭国貞画) 大判 葛屋吉蔵 極
- 図 3 国会図書館
『朧染浮名之色衣』四巻卷末蔵版目録 葛屋吉蔵 文政六年 207-855
- 図 4 都立中央図書館特別文庫
「道外見富利十二志」歌川国芳(一勇斎国芳例の戯画)大判三枚組の内 恵比寿屋庄七 村田・米良 584-C009-02
- 図 5 演劇博物館
「びく者おしゅん」岩井半四郎]ほか 歌川国芳(一勇斎国芳画)大判三枚続 丸屋清次郎 極 005-0560・101-3481・101-3482
- 図 6 Victoria and Albert Museum
「うぐら権兵衛」大谷友右衛門・寺西かんしん 嵐冠十郎]ほか 歌川国芳(一勇斎国芳画)大判三枚続 太田屋佐吉 極
- 図 7 Victoria and Albert Museum
「うぐら権兵衛」大谷友右衛門]ほか 歌川国芳(一勇斎国芳画)大判三枚続 上州屋重蔵 極
- 図 8 演劇博物館
「当盛三福対 お千代」岩井半四郎]歌川国芳(一勇斎国芳画)大判 川口屋長蔵 極 101-3277
- 図 9 個人蔵
歌川国芳画「幡する長兵衛 坂東三津五郎」(一勇斎国芳画) 大判 江戸屋松五郎]か 極
- 図 10 ベルリン国立アジア美術館
「大ふく屋宗六 沢村訥升 小女沢村沢平]ほか 歌川国貞(五渡亭国貞画) 大判三枚続 葛屋吉蔵 極
- 図 11 阪急文化財団池田文庫
「金谷金五郎 市川団十郎]ほか 歌川国貞(五渡亭国貞画) 大判三枚続 山口屋藤兵衛 極
- 図 12 早稲田大学図書館
『瑠璃紫江戸朝顔』後編卷末 市川三升作 歌川豊国画 山口屋藤兵衛 文政五年
- 図 13、15 早稲田大学図書館
「一番大鼓春の曙」前・後編卷末 市川三升作 歌川豊国画 西宮新六
- 図 14 国会図書館
「江都錦双蝶曾我」六巻卷末 市川三升作 歌川国貞画 山口屋藤兵衛 文政七年 207-1180
- 図 16 個人蔵
「口上茶番 六歌仙 景物 仙女香美玄香 坂本氏」歌川国貞(香蝶楼国貞画) 横大判 葛屋吉蔵 極
- 図 17 中井文庫
『須磨浦の滯事新口村の愁嘆 忍弾仇汐汲』瀬川路考作 歌川国貞画 西宮新六 文政六年
- 図 18 国会図書館
『牛嶋土産』三巻中之巻 滝亭鯉文作 溪斎英泉画 越前屋長次郎 文政七年 208-140